論文要約

現代日本における道徳教育の理論と実践に関する教育学的研究

小林　万里子

Ⅰ　論文題目

現代日本における道徳教育の理論と実践に関する教育学的研究

Ⅱ　論文構成

序　章　　本研究の目的と方法
　１.「特別の教科　道徳」をめぐる今日的状況
　２．本研究の課題
　３．先行研究と本研究の意義
　４．本研究の構成

第１章　　戦後日本の道徳教育政策の展開 ― 「道徳の時間」を中心に
　第１節　「道徳の時間」の特設
　　１．全面主義の確立
　　２．全面・特設主義への転換
　　３．道徳教育関連学会の設立
　第２節　　心の教育への傾倒
　　１.「心」への注目
　　２.「心のノート」
　　３.「私たちの道徳」への全面改訂
　第３節　「特別の教科　道徳」の成立
　　１．教育改革国民会議
　　２．徳育の教科化
　　３．教育再生実行会議
　　４．道徳の教科化に向けた具体的論議
　　５.「特別の教科　道徳」の全体像

第２章　　道徳授業論の多様化 ― 「道徳の時間」の指導論
　第１節　　基本型（価値の内面化）授業論の確立
　　１．生活主義的な授業論
　　２．価値主義的な授業論
　　３．生活主義と価値主義の止揚 ― 新価値主義的道徳授業論
　　４．基本型授業の特質と意義
　第２節　　基本型批判としての授業論の広がり
　　１．価値明確化
　　２．モラルジレンマ授業とジレンマ学習
　　３．討議による道徳授業（コミュニケーション・ルールの学習）
　　４．モラル・スキル・トレーニング
　　５．統合的道徳教育
　第３節　　道徳授業研究の到達点
　　１．学習内容としての道徳的価値
　　２．思考を深めるための学習活動
　　３．子どもの生活とのつながり

第３章　　現代的な教育課題と道徳学習 ― 全教育活動を通じた道徳教育の指導論
　第１節　　体験活動と教科・領域横断的な学習
　　１．学校への体験活動の導入
　　２．教科・領域横断的学習への注目
　第２節　　総合単元的道徳学習論の意義
　　１．総合単元的道徳学習論の背景
　　２．総合単元的道徳学習プログラムの構成
　　３．道徳教育カリキュラム構想への示唆

第３節　現代的な教育課題への対応
１．いのちの教育
２．環境教育（持続可能な社会のための教育）

第４章　道徳教育理論・実践に対する批判的検討
第１節　実践的契機としてのシティズンシップ教育
１．シティズンシップ教育への関心
２．日本におけるシティズンシップ教育実践
３．シティズンシップ教育からの示唆
第２節　理論的契機としての教科横断的学習論
１．教科横断的学習論の多元性
２．教科連結型学習論における教科学習の意義
３．教科連結型学習論からの示唆

第５章　道徳教育実践学の意義と研究課題
第１節　慣習的道徳の伝達と道徳的思考力の育成 ― 道徳教育の内容構成
１．倫理的問題 ― 哲学教育からの示唆
２．発達に応じた内容構成 ― シティズンシップ教育からの示唆
３．指導内容を支える論理
第２節　全面・特設主義の実質化
１．指導場面の明確化
２．道徳科の授業
３．道徳教育のカリキュラム
第３節　学校における道徳教育の役割
１．国民形成の場としての学校と道徳教育
２．グローバル化への対応
３．学校における道徳教育の再定義

終　章　本研究のまとめと今後の課題
１．総括（各章の概要）
２．道徳教育実践学の可能性
３．残された課題

Ⅲ　各章の概要

序章　本研究の目的と方法

本研究の目的は、学校での道徳教育を支え、時には批判する教育学的研究の全体像を描き出すことである。言い換えるなら、哲学、倫理学や心理学の応用分野としての道徳教育ではなく、教育学の一分野として道徳教育を論じる意義と必要性を確認し、その研究枠組みを提示することをめざしている。学校における道徳教育は複層的に展開されるからであり、道徳教育にはさまざまな学問領域からのアプローチが存在し、それらを関連づける視座をもつ必要があるからである。

「道徳の時間」が特設されて以降、小・中学校における道徳教育は全面・特設主義のもとで実施され、この方針は「特別の教科　道徳」になっても変わらない。したがって、例えば道徳授業の指導方法論の意義を明らかにするには、教科等での学習指導や日常的な指導、場合によっては家庭や地域社会での教育活動との関連が視野に入れられる。心理学の知見を活かした授業構成や教材であっても、指導論としては教育学的視座からの評価が求められる。

道徳教育を教育学的に論じる必要性はこれまでも指摘されてきた（例えば谷田 2004，林 2009，林 2018）が、その全体像や研究課題は示されていない。そこで本研究は、以下の二点を具体的な課題とした。

第一に、1950 年代半ば以降の日本における道徳教育政策を背景として展開されてきた「道徳の時間」や学校教育全体を通じておこなう道徳教育の指導論を整理し、その成果や到達点を見定めることである。戦後道徳教育の流れを扱った先行研究を概観すれば、「道徳の時間」の特設前後の時期に限定したもの、教育政策の変遷に関連させながら通史的に捉えたもの、著名な人物に焦点を当てたものなどがある（例えば押谷 2001，江島 2016，行安／廣川（編）2012）。いずれも論者の立場や関心に従ってトピックが選択されており、道徳教育をめぐる議論の一側面を描き出したに過ぎない。本研究では、「道徳の時間」特設以降の小・中学校における道徳教育を中心とした議論を跡づけることで、当事者たちが言及しなかった論点を浮かび上がらせる。

第二に、これらの論点を引き受けつつ、道徳教育に関わる新たな研究のあり方を展望するために、学校における道徳教育について包括的に扱う研究領域「道徳教育実践学」を構想することである。道徳教育実践学では、全面・特設主義のもとで展開される具体的な教育活動、教育活動を支える指導論、指導論の吟味や道徳教育の新たな理念や方向性など、多層にわたる議論が展開される。理論と実践を循環する研究活動を促進するだけでなく、実践的な研究を俯瞰し省察すること、すなわち、学校における道徳教育の意義や限界を検討する視角も常に保持しておく。したがって、道徳教育実践学とは、これまでの道徳教育に関わる研究成果を適切に織り込みながら、道徳教育実践に関わる研究の客観性や普遍性を高めるとともに、それをメタレベルで批判する研究領域と言える。

第 1 章　戦後日本の道徳教育政策の展開 ― 「道徳の時間」を中心に

1958（昭和 33）年に「道徳の時間」が小・中学校の教育課程上に位置づけられた経緯を概観し、2015（平成 27）年に「特別の教科　道徳」が成立するまでの約 60 年間にわたる道徳教育政策の動向を整理した。

週 1 時間の授業がありながらも各教科等における道徳教育との関連性を強く意識する全面・特設主義のもとで「道徳の時間」は実施されてきた。1980 年代以降は「新しい学力観」や「生きる力」といった教育政策のキーワードに後押しされて「道徳の時間」の指導は次第に心情主義的になっていく。この傾向は、小・中学校学習指導要領において道徳の内容が「四つの視点」で区分され（1989 年）、子どもの内省を促す「心のノート」が配布された（2002 年）ことに看取できる。

一方、教育（実践）的な関心とは別の論理で教科化への動きが生じた。教育改革国民会議（2000 年）、教育再生会議（2007 年）、教育再生実行会議（2013 年）の度重なる提言である。教育再生実行会議は、いじめ問題への対応策の一つとして道徳教育の充実を挙げ、これまでの道徳教育の成果と課題の検証をふまえつつ、教科化に向けた議論の進展を求めた。これを受けて文部科学省で具体的な検討が進められ、2014（平成 26）年には「特別の教科　道徳」成立の方針が確定した。

第２章　道徳授業論の多様化 ― 「道徳の時間」の指導論

前章で整理した政策や制度を背景とする小・中学校における指導の実際、とりわけ「道徳の時間」の指導方法に関わる議論を明らかにした。特設直後の「道徳の時間」では生活指導的ないし問題解決的な指導が主流を占めたが、文部省『道徳の指導資料』の作成・配布を契機として、読み物資料を用いた指導が広まった。いわゆる基本型（価値内面化）の道徳授業の成立である。基本型授業に対抗する授業論も 1980 年代以降に断続的に示されたが､その共通点や相違点を整理する議論はほとんど見られず、結果的に基本型授業を補完する機能を果たしている。

これらの授業論を整理すると、現時点での道徳授業研究の到達点が浮かび上がる。第一に、1 時間に複数の内容項目を扱うか否か、道徳的価値を所与のものとみなすか吟味の対象と捉えるかといった違いはあるものの、道徳授業の学習内容は学習指導要領に示された内容項目（道徳的価値）とされている。つまり、道徳授業の構想および実践を通して学習指導要領の内容を捉えなおそうとする関心が乏しかったと言える。第二に、道徳授業においては中心的な学習活動としての話合いとともに、学習と子どもの生活との関連づけが重視されてきた。これらは学校の授業として道徳教育をおこなうことの意義を示唆するものの、それを指摘する議論は存在しない。

第３章　現代的な教育課題と道徳学習 ― 全教育活動を通じた道徳教育の指導論

小・中学校には年間 35 時間の「道徳の時間」が置かれ、道徳教育はこれを要として教育活動全体を通じておこなうとされてきた。高等学校に「道徳の時間」はないが、ホームルーム活動等を指導の中核場面として道徳教育がおこなわれる。そのため、小・中・高等学校のいずれの学校段階においても、例えば環境教育、いのちの教育、キャリア教育などに際して、道徳教育の観点が組み込まれやすい。

このような道徳の特質を活かして提唱されたのが総合単元的道徳学習論であった。子どもの道徳学習は「道徳の時間」で完結するものではなく、また、学校での学習だけに閉じられたものではないと捉えられ、子どもの思考や関心の広がりや深まりを軸にして、各教科等の学習や日常生活における指導、家庭や地域社会と連携協力しておこなう活動などを数週間から数ヶ月にわたって実施するプログラムがつくられる。総合単元的道徳学習論は、全面・特設主義の道徳教育を具現化したものと特徴づけられるにとどまらない。近年、主権者教育、消費者教育、防災教育など教科・領域横断的な学習を必要とする教育課題がさらに増加している。いずれの教育課題についても道徳の指導内容と関連づけることが可能であり、今後も各学校の特色や課題に応じた学習プログラムが構想されていくと予想される。こうした学習を道徳教育の一環として意味づけて、教科・領域横断的な学習を推進するカリキュラム・マネジメントを支える論理の構築が、今後は求められる。

第４章　道徳教育理論・実践に対する批判的検討

第３章までで明らかになった道徳教育の理論と実践を批判的に検討する視座を得るため、まず実践面では日本におけるシティズンシップ教育を参照した。「自己の生き方」だけでなく「社会を

構成する一員としての主体的な生き方」を考えることも道徳教育においては重要と考えられるからである。1990 年代以降、日本でもシティズンシップ教育に取り組まれており、東京都品川区「市民科」やお茶の水女子大学附属小学校の「市民」が知られている。これらの実践への批判として、具体的な行動に結びついたとしても一過性が強く、将来的な社会参画を展望しにくいことが挙げられよう。シティズンシップ教育の学習成果が個々の子どもの資質・能力や態度のレベルにとどまるからであり、これは道徳教育にも当てはまる批判である。

理論面での視野を広げるため、ドイツの教科横断的学習論、とりわけ教科連結型学習論に着目した。教科連結型学習論では教科学習の限界が指摘されるが、その眼目は教科学習を廃止することではない。教科学習を前提としたうえで、複数の教師の協議により、あるテーマのもとに複数の教科を結びつけて一定期間の学習をおこなうことを提案するものである。そして、教科連結型学習の構想にあたっては、教科固有の論理を保持したまま学習テーマに迫るのではなく、扱うテーマによって達成される教育目標に即して各教科の役割を捉えなおすことが重視される。これに照らしてみると、全面・特設主義の道徳教育というものの、「道徳の時間」の学習と教科等における道徳学習との区別が曖昧であったことが分かる。指導場面の特性に応じて、指導の重点や方法を変える試みが求められるし、そうした取組を通じて教科としての道徳学習の独自性を明らかにしていく必要があるだろう。

第５章　道徳教育実践学の意義と研究課題

学校における道徳教育について体系的な研究を進めるには、教育学的思考を基盤とする研究領域の確立が望まれる。それを本研究では道徳教育実践学と名づけ、これまでの成果から導出される具体的な研究課題を示して、今後の展望を描出することとした。

例えば、道徳教育の内容に関して、これまで自明視されてきた慣習的道徳が現代社会においても妥当であるかを根本的に見直すことが求められる。今後の社会変化を見通したときには、慣習的道徳を批判的に捉えなおす道徳的思考力の育成を視野に収めてもよい。そうすれば、学校段階に応じて指導の重点を慣習的道徳の伝達から道徳的思考力を発揮する慣習的道徳の吟味へと移行するといった、小学校から高等学校までの内容の扱いの大まかなイメージを描くことも可能となる。また、内容に応じて適切な指導場面や指導方法を定めることも研究課題となるだろう。

ただし、現状では、内容項目のすべてを道徳授業で扱うことが求められており、「特別の教科　道徳」の授業に関わる議論の蓄積が喫緊の課題となる。実践事例と実践に関わる省察が広く活かされるには、その特質や主張点が他との比較のなかで明らかにされる必要がある。授業者が依拠する授業論ないし授業観が明示されることにより、具体的な実践を通した授業論の特質の明確化が進むだろう。また、新たに教科用図書が導入されることから、教材に関する研究の進展も望まれる。読み物が教材として立ち上がるためには、授業のなかで、教師による指導と子ども（たち）の学習活動を媒介するものとして位置づけられる必要がある。具体的な実践をもとに教材や指導方法を検討し、次の実践に向けた改善策が提唱されるという往還的な研究が求められるのである。

終章　本研究のまとめと今後の課題

道徳教育をめぐる議論を整理すると、「道徳の時間」の指導に関して、いわゆる基本型の授業スタイルが成立した後、基本型へのアンチテーゼとして提唱された授業論がある。だが、「基本型　対新しい授業論」という二項対立図式に収められてしまい、それぞれの授業論の特質を描き出し、相互補完をめざす授業論研究はほとんど存在せず、結果的に多くの授業は基本型で実施されてきた。また、授業論の比較検討を通して「道徳の時間」の存在意義を浮かび上がらせたり、学習指導要領に示された指導内容の妥当性を検証したりする研究は見られない。一方、学校教育全体を通じておこなう道徳教育に関しては、全面・特設主義を具現化する構想として総合単元的道徳学習論が提唱された。教科・領域横断的学習が広まるなかで、道徳教育を基軸としたカリキュラム構想は評価できるが、道徳授業の意義は関連的な指導では成しえないところにある。他教科等での道徳教育から逆照射される道徳授業の特性を明らかにする必要がある。

以上の論点や研究課題は本研究を通して抽出されたものであり、道徳教育に関わる議論のなかで醸成されてきたものではない。こうした論点を形成し、継続的な議論を積み上げるには、道徳科の学習指導、全教育活動を通じた道徳教育、人間形成ないし市民形成といった複層的な課題について、理論と実践を往還しながら追究する研究領域の構築が求められる。本研究では、道徳教育実践学の研究課題を提示するとともに、道徳教育実践学がこれまでの成果と課題をていねいに受けとめ、現代社会における学校と子どもの状況に即して改善策を検討しうることを論証してきた。今後、さらに多様な研究課題を的確に位置づけるには、道徳教育実践学が主として〈実践を構想し展開する理論〉と〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉から構成されるものと捉えることが有効であろう。

〈実践を構想し展開する理論〉は具体的な教育実践を想定した議論を主眼とする。学校に通ってくる一人ひとりの子どもの生活にも適切に配慮しつつ、教師がどのようにふるまい、学習指導を進めていくかに焦点を当てた考察が求められる。具体的には道徳の授業論、教材論、評価論、カリキュラム論などが挙げられる。これに対して〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉は〈実践を構想し展開する理論〉を相対化し、批判的に吟味する立場を取る。〈実践を構想し展開する理論〉が現在の学校教育を支える傾向が強いのに対して、〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉は現行制度をも批判の対象とするため、今後の議論の展開可能性をより広く描き出すことが可能になる。例えば複数の授業論について、その理論的・思想的背景を含めて比較し、相違点や相互補完性を明らかにする。また、学校の教育課程における道徳の位置づけや学習指導要領の記載内容を原理的かつ批判的に検討したり、教員養成や教師教育に対する提言をおこなったりする。つまり、現実的な学校教育の文脈から切り離したところでの考察をおこない、再度、現実との接点を見いだし、〈実践を構想し展開する理論〉を充実させていく役割を担う。さらに、道徳教育に対しては多様な学問領域からのアプローチが可能であることをふまえると、〈実践と理論を基礎づける理論〉を位置づけることができる。哲学や倫理学、心理学、社会学などにより学校における道徳教育を包括的に捉えたり分析したりすることは難しいけれども、〈実践を構想し展開する

理論〉と〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉研究を進めるなかで、議論や主張の基盤を形成するために適宜、参照されることは有意義である。このように考えるならば、例えば次のような研究の回路が形成される。

第一は、実践と〈実践を構想し展開する理論〉とを循環する回路である。これまでも〈実践を構想し展開する理論〉としての授業論が存在し、それが実践への示唆を与えることはあったけれども、実践をふまえて授業論を検証し、改変していく試みはあまり見られない。実践を主導する理論という理論‐実践観がこうした一方通行の関係をつくり出したと推測される。だが、〈実践を構想し展開する理論〉は実践を通して意味づけられるものであり、理論と実践とは双方向的に捉えられる必要がある。

第二は、〈実践を構想し展開する理論〉を基点とし、〈実践と理論を基礎づける理論〉を経て〈実践を構想し展開する理論〉に戻る回路である。近年、日本でも広まりつつある哲学教育（子ども哲学）は、哲学や倫理学の関心から道徳授業のあり方を提案するものである。現行の道徳授業を批判し、これからの道徳教育を展望するのに示唆的であるが、ある程度の実践が積み重ねられた後には授業論としての体系性や一貫性を整えることが望ましい。そして、第一の回路を通じて実践による検証や改善をおこないつつ、あらためて教材の適切性や妥当性を吟味する回路として第二の回路を機能させるとよいのではないか。

この他にも、〈実践を構想し展開する理論〉と〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉とを結ぶ回路や、〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉研究にあたり〈実践と理論を基礎づける理論〉を参照するという回路も創出されるだろう。これらの回路が駆動し、道徳教育に関する研究が相互に関連づけられ、議論の足場が組み上げられることにより、先行事例や先行研究をふまえた問題の把握や解決策の検討が可能になる。とりわけ〈実践と理論を（批判的に）検討する理論〉には、これまでの実践や研究の成果の冷静な分析と整理や、新たな研究課題の提示が期待される。さらに、学校における道徳教育のあり方を根源的に問うたり、既存の研究視角を批判し再構築したりする姿勢も望まれる。

道徳教育実践学は、道徳教育実践の複層性、道徳教育に関わる学問領域の多様性を保持しつつ学校の道徳教育に関わる議論の布置関係を明らかにする研究領域である。本研究ではその全体像を描き出そうとしたが、教師教育に関わる論点に言及できなかったし、十分に取り上げられなかった研究もある。これから取り組まれる研究を含めて適切に位置づけられるか、また、こうした枠組みが道徳教育に関わる組織的で継続的な研究の推進に有効であるかについての精緻な検証を進める必要がある。

教育学における道徳教育実践学の位置づけや他領域との関連の明確化も重要であろう。一般教授学と教科教授学がともに位置価を確保しているドイツの教育学研究の動向や、1960 年代以降の日本の教科教育学研究の展開などを参照しながら、道徳教育実践学が学として存立する基盤を確認していくことを今後の課題としたい。

Ⅳ　主要参考文献・資料

青木孝頼（編著）『道徳指導シリーズ 6 道徳価値の一般化』明治図書、1966 年
青木孝頼（編著）『道徳指導双書 4 道徳資料の活用類型』明治図書、1979 年
荒木紀幸「兵庫教育大学方式によるモラルジレンマ授業の研究 ― コールバーグ理論に基づくモラルジレンマ授業と道徳性の発達に及ぼす効果について ― 」、日本道徳性発達実践学会『道徳性発達研究』第 9 巻第 1 号、2015 年所収
上田薫『上田薫著作集 6　道徳教育論』黎明書房、1993 年
上地完治「学校教育としての道徳教育 ― 道徳教育の再定義に向けて ― 」、兵庫教育大学学校教育研究会『教育研究論叢』第 4 号、2002 年所収
上地完治「社会構成的な道徳教育の創造へ向けて」、『琉球大学教育学部紀要』第 67 集、2005 年所収
梅根悟（監修）『世界教育史大系 39 道徳教育史Ⅱ』講談社、1977 年
江島顕一『日本道徳教育の歴史 ― 近代から現代まで ― 』ミネルヴァ書房、2016 年
蛯谷米司『教科教育学概論』広島大学出版研究会、1986 年
小笠原道雄／森川直／坂越正樹（編）『教育的思考の作法 2 教育学概論』福村出版、2008 年
小笠原道雄／田代尚弘／堺正之（編）『教育的思考の作法 4 道徳教育の可能性 ― 徳は教えられるか ― 』福村出版、2012 年
押谷由夫『総合単元的道徳学習論の提唱 ― 構想と展開 ― 』文渓堂、1995 年
押谷由夫『「道徳の時間」成立過程に関する研究 ― 道徳教育の新たな展開 ― 』東洋館出版社、2001 年
お茶の水女子大学附属小学校「市民」研究部（編著）『提案や意思決定の学びを市民的資質につなげる』NPO 法人お茶の水児童教育研究会、2004 年
お茶の水女子大学附属小学校「市民」研究部（編著）『社会的価値判断力や意思決定力を育む「市民」の学習』NPO 法人お茶の水児童教育研究会、2010 年
貝塚茂樹（監修）『戦後道徳教育文献資料集　第Ⅰ期　4』日本図書センター、2003 年
貝塚茂樹（監修）『戦後道徳教育文献資料集　第Ⅱ期　17』日本図書センター、2004 年
貝塚茂樹（監修）『戦後道徳教育文献資料集　第Ⅲ期　36』日本図書センター、2004 年
貝塚茂樹（監修）『文献資料集成　日本道徳教育論争史　第Ⅲ期　戦後道徳教育の停滞と再生　第 14 巻　道徳教育の課題と授業論をめぐる論争』日本図書センター、2015 年
貝塚茂樹（監修）『文献資料集成　日本道徳教育論争史　第Ⅲ期　戦後道徳教育の停滞と再生　第 15 巻　「心のノート」と道徳の「教科化」論争』日本図書センター、2015 年
金光靖樹「生命尊重の道徳授業における長期的プログラムの必要性について」、『大阪教育大学紀要』第Ⅳ部門、第 56 巻第 1 号、2007 年所収
キャム，P.［桝形公也（監訳）・衛藤吉則／柏葉武秀／菊池健至／中川雅道／森秀樹（訳）］『子どもと倫理学 ― 考え、議論する道徳のために』萌書房、2017 年
現代道徳教育研究会（編）『道徳教育の授業理論 ― 十大主張とその展開 ― 』明治図書、1981 年
小玉重夫『シティズンシップの教育思想』白澤社、2003 年
小林万里子／堺正之「道徳教育カリキュラム構成原理としての規範意識」、日本道徳教育学会『道徳と教育』No.328、2010 年所収
小林万里子「近年の道徳教育をめぐる議論の諸相」、中国四国教育学会『教育学研究紀要』（CD-ROM 版）第 62 巻、2017 年所収
堺正之『道徳教育の方法』放送大学教育振興会、2015 年
品川区教育委員会市民科カリキュラム作成部会（編）『品川区小中一貫教育　市民科』教育出版、2006 年
全国道徳特別活動研究会『道徳・特別活動の本質 ― 青木理論とその実践 ― 』文渓堂、2012 年
田中耕治（編著）『戦後日本教育方法論史（上） ― カリキュラムと授業をめぐる理論的系譜 ― 』ミネルヴァ書房、2017 年
田中耕治（編著）『戦後日本教育方法論史（下） ― 各教科・領域等における理論と実践 ― 』ミネルヴァ書房、2017 年
谷田増幸「現代英語圏における道徳教育論の展開と諸相 ― R.S.ピータースにおける教育哲学の構想を基点として ― 」（兵庫教育大学博士論文）、2004 年
谷田増幸「道徳教育における『規範意識の醸成』 ― 教育課程上の位置付け、教育実践、学的検討の視点から ― 」、教育哲学会『教育哲学研究』第 107 号、2013 年所収
道徳教育事典編集委員会（編）『道徳教育事典』第一法規、1965 年

徳永悦郎「実践をもとにした「ジレンマ授業批判」分析」、日本道徳教育方法学会『道徳教育方法研究』第 3 号、1997 年所収
徳永悦郎「道徳教育に関する代表的な教授理論の相互補完に関する基礎的研究」、日本道徳教育方法学会『道徳教育方法研究』第 6 号、2000 年所収
中原朋生『現代アメリカ立憲主義公民学習論研究 ― 憲法規範を基盤とした幼稚園から高等学校までの子どもの市民性育成 ― 』風間書房、2015 年
日本教育方法学会（編）『教育方法学研究ハンドブック』学文社、2014 年
日本教科教育学会（編）『今、なぜ教科教育か ― 教科の本質を踏まえた授業づくり ― 』文渓堂、2016 年
日本教科教育学会(編)『教科教育研究ハンドブック ― 今日から役立つ研究手引き ― 』教育出版、2017 年
日本教材学会（編）『教材事典 ― 教材研究の理論と実践』東京堂出版、2013 年
日本教材学会（編）『教材学概論』図書文化、2016 年
日本道徳教育学会（編）『道徳教育入門 ― その授業を中心として ― 』教育開発研究所、2008 年
林忠幸（編）『新世紀・道徳教育の創造』東信堂、2002 年
林泰成『新訂　道徳教育論』日本放送出版協会、2009 年
林泰成「道徳教科化の諸問題と教育哲学の役割」、教育哲学会『教育哲学研究』第 112 号、2015 年所収
林泰成『道徳教育の方法 ― 理論と実践（放送大学叢書 041）』左右社、2018 年
樋口聡「教科『内容学』の図式的展望」、『広島大学教育学部紀要』第二部　第 36 号、1987 年所収
ビースタ，G.［上野正道／藤井佳世／中村（新井）清二（訳）］『民主主義を学習する ― 教育・生涯学習・シティズンシップ ― 』勁草書房、2014 年
平野武夫『価値葛藤の場と道徳教育 ― 道徳教育学の構想 ― 』黎明書房、1967 年
広島大学教科教育学研究会（編）『教科教育学Ⅰ　原理と方法』建帛社、1986 年
広島大学教科教育学研究会（編）『教科教育学Ⅱ　教科課程論』建帛社、1986 年
船山謙次『戦後道徳教育論史（上)』青木書店、1981 年
船山謙次『戦後道徳教育論史（下)』青木書店、1981 年
松下良平『知ることの力－心情主義の道徳教育を超えて－』勁草書房、2002 年
松下良平「道徳教科化と国民国家をめぐる政治学 ― いずれのシナリオを選ぶのか ― 」、『現代思想』第 43 巻第 8 号、青土社、2015 年所収
松下良平「道徳科構成原理論　Ver. 1.0」、教育哲学会『教育哲学研究』第 112 号、2015 年所収
丸山恭司（編著）『道徳教育指導論』協同出版、2014 年
嶺井明子(編著)『世界のシティズンシップ教育 ― グローバル時代の国民／市民形成 ― 』東信堂、2007 年
森田伸子『子どもと哲学を ― 問いから希望へ ― 』勁草書房、2011 年
行安茂／廣川正昭（編）『戦後道徳教育を築いた人々と 21 世紀の課題』教育出版、2012 年
吉冨芳正／田村学『新教科誕生の軌跡 ― 生活科の形成過程に関する研究』東洋館出版社、2014 年
リップマン，M.［河野哲也／土屋陽介／村瀬智之（監訳)］『探求の共同体 ― 考えるための教室』玉川大学出版部、2014 年
リップマン，M.／シャープ，A.M.／オスカニアン，F.［河野哲也／清水将吾（監訳)］『子どものための哲学授業 ― 「学びの場」のつくりかた』河出書房新社、2015 年
若月秀夫（編著）『品川発「市民科」で変わる道徳教育』教育開発研究所、2009 年
渡邉満「教室の人間関係に根ざす道徳教育試論」、日本道徳教育方法学会『道徳教育方法研究』第 5 号、1999 年所収
渡邉満／押谷由夫／渡邊隆信／小川哲哉（編著）『「特別の教科　道徳」が担うグローバル化時代の道徳教育』北大路書房、2016 年

Peterßen,W.H.: Fächerverbindender Unterricht. Begriff - Konzept – Planung - Beispiele. Oldenbourg 2000.
Peterßen,W.H.: Kleines Methoden-Lexikon. 3., überarbeitete und erweiterte Auflage. Oldenbourg 2009.
Roßa,A.-E.: Zum Verhältnis von Allgemeiner Didaktik und Fachdidaktik in der Lehrerbildung. Einschätzungen von Lehramtsstudierenden zur Fähigkeitsentwicklung in universitären Praxisphasen. Bad Heilbrunn 2013.